

釋迦如來像 解説

東京 深大寺藏

關東地方に遺存する奈良初期佛像の類稀なる一例として、且我國有数の美作として名だたるもので、今更冗説を要せぬ所である。しかも本像傳世の経歴は何等史乘に傳へる所なく、明治以降甫めて江湖に紹介されたものと云ふ。傳へて釋迦像と云ふ、右手中指无名指の缺損によつて印相は定かでないが、恐らく膝上に安ずる左手と同じきものであつたと覺しく、所謂與願施无畏の印相に近きを以てかく呼ばるゝのであらう。

ざんぐりとした顴痕によつて頭髮を表はし、髮際の線はなだらかな曲線を描き、微妙な陰影に富む頬の肉附、短かく廣い人中線、小さく柔かな口許等の自然的な表現に對して、眉から鼻梁に通ずる強い双曲線と、細い切長な眼——殊に奈良新藥師寺香藥師像にその類例を見る所の、瞳を刻まずして兩瞼の間に横一文字に稜線を刻出する特異な技法とが、佛像としての理想型を逐ふ表現を見せ、この相反する二傾向の渾然たる融合によつて、本像は佛像としての端嚴を失はず、しかも可憐愛すべき獨特なる美しさを見せてゐる。首の据り、肩の流れ、腹の出、膝の開き、——殊に右膝を少しく開きたる——極めて安樂に、此時代のものにやゝもすると見ゆる拮据な所は少しも残してゐない。強いて言はゞ兩足のみ、全體の流麗さに似氣なく、厚手に且無骨に刻まれてゐることを一つの難としやうか。通肩に着たる衣は肌に緊着し、方座に隨つて垂るゝ裳と共に襞の刻は淺く、簡約に様式化されて繁褥の感を與へぬ。全身の均衡に見るも、當代のものに多く見る頭大の夫にあらで略實人に近い。

その整齊、豊美に過ぎたる容姿と、衣褶の簡約なる様式化を物足らず思ふとによつて、甚しく本像の製作年代を下降せしめて説くものもあると聞くが、吾

釋迦如來像、仁清作色繪瓔珞文花生

人は固より奈良初期の優作と斷ずるに些かも躊躇せぬものである。例へば本像と新藥師寺香藥師等とを比較してその共通點を玩味し、更に例へば模古作に一流行を示した鎌倉期に於ける其類の逸品として知らるゝ法隆寺金堂康勝作阿彌陀像の如きとを比較するならば這裏の判定は多言を須ひずして明かであらう。

仁清作色繪瓔珞文花生 解説

京都 仁和寺藏

所謂中燕の澁面耳付の花生である。一見上部は大に失し、下部は小に過ぎ、異風にして不安定を感じしめる如き形をして居るが、口、胴、脚の均合も面白く、重き脚はよく安定を保ち全體に整美せる姿をなし、且つその大きな口の擴りは限りなく延び行くかとも見へてこの美姿に雄勁なる趣を興へてゐる。この姿、この勢こそは輻輳をひいては前に先人なく、後に來者なしと評せられた仁清の輻輳の至藝あつてはじめて生み出されたものである。併しこゝでは更に形の妙趣をも賞したい。これと類似形のものはずでに支那に於て宋の青磁、白磁にも有り、明の萬曆頃より清にも亦多く見るが、尙ほ同形のものを十四世紀頃のアラビヤのランプに見出し、それには趣致に於ても相通ふものがある如く思はれる。勿論呂宋眞壺の形に漢物茶入の形を折衷して國風の飾茶壺を作り、獨特の仁清形を作り出した巨匠であれば上の支那磁器に習つてかくの如き形を工夫したと想像されるが、一方、形、趣致と共に文様にもアラビヤ風の窺はれる點等より推して、本器の製作についてはこれらの形制に今直接に關係ありしか否かは計り難いとしても、或ひは何らか關聯あつたのではなからうかとも想像される。土は信樂土で特にこげ易いものと云はれて居り胎は薄く、釉は土灰釉にして灰白色をなし、やゝ厚く掛けられ仁清特有な連錢瓔珞が現はれてゐる。その際立つた破風掛、これは仁清が茶壺等にしばく用ひ、茶人が賞したものである

